

古在由秀氏ロングインタビュー 第4回：台長時代（1）



高橋 慶太郎

〈熊本大学大学院自然科学研究科 〒860-8555 熊本県熊本市中央区黒髪2-39-1〉

e-mail: keitaro@sci.kumamoto-u.ac.jp

協力：小久保英一郎（国立天文台）、高橋美和

今回はアメリカでの研究生活と古在氏の代表的な研究業績である古在機構について伺いました。今回はいよいよ台長時代です。古在氏は13年という長い期間にわたって東京天文台長・国立天文台長を務められましたが、その間に国立天文台への改組、大型望遠鏡計画（後のすばる）の推進という2つの大きな問題に取り組みました。そしてこの時代に現在の国立天文台、ひいては日本の天文学の研究体制が形成されたのです。本連載は全4回の予定でしたが、台長時代の話が非常に豊富であることから2回に分割し、全5回とすることにいたしました。また、末尾に今回のお話の背景となる基礎知識をまとめておきましたので合わせてご覧ください。

●東京天文台長

高橋：では、台長時代のことを伺いたいと思います。古在先生は1981年に東京天文台長になり、その後1988年に改組して国立天文台長になったということですね。まず東京天文台長になる経緯からお願いしていいでしょうか？

古在：経緯というか、あんまりちゃんとわかんないけどもね、要するに僕らがまだ30代、40代の頃は畑中(武夫)さんが希望の星だったんだよね。ところが、僕がアメリカから帰ってきた次の年に亡くなったでしょ？ それで萩原(雄祐)先生の後は宮地(政司)さん、その次は広瀬(秀雄)さんが台長で。広瀬さんの時が東大紛争でね。東大紛争の時には東大評議員は総辞職したでしょ？ その時にあの人も台長を辞めて、その次になったのが古畑(正秋)さんっていう人で、その次が大沢(清輝)さんっていう分光学の人。それでどうもね、古畑さんがなる頃から俺は台長選挙ではけっこう票数があったんだよ。なんだか知らないけど、そ

れでね、大沢さんなんか、「あんな奴がなったら大変だ」というんでね、大沢さんが辞める時に末元(善三郎)さんと呼んできて台長にしたんだ。末元さんはもともと天文台にいてタワー望遠鏡でやった人だけど、畑中さんが亡くなった後で理学部に移って。僕はそれを全然知らなかったけど、他の人はみんな知ってたらしくて。ただ、その時にけしからんと思っていた人もいたらしくてね。それで僕はその時に、日本学術会議の天文研究連絡委員会の委員長に当選したんだよ。それでずうっと天文学研究連絡委員会の委員長をやっていたんだよ。

それで古畑さんの時かな、なんか天文台の台長の任期は定年で辞める年の3月31日までだったんだけど、これはおかしいから1月15日にしろって言ってね。1月15日にしたんですよ。だから、大沢さんなんかも定年の年の1月15日に辞めたんだね。ところが末元さんはね、どうも自分が3月までやるっていうことでみんなに運動させたらしいんだよ。

高橋：3月と1月でそんなに違うんですか？

古在：いや、だから、辞める時まで働かせるなっというのが古畑さんの意見で。

小久保：1月15日に辞めて、残りは自由にさせるっていう？

古在：そうそう。だと思ふよ。それでその時の選挙では末元さんと僕とが同票だったんだよ。ところが年長者を採るっていうんで、末元さんの台長任期が2カ月伸びて。それはまた方々からいちゃもんがついたんだ。なんでそんな2カ月ぐらいの台長に就くんだとか。それで3月の時にまた揉めて…。

高橋：1月までの任期で、3月までの2カ月のために投票したんですか？

古在：そう、3月31日までの任期になったんだよ。それでその後の選挙で僕がかろうじて当選したんだよ。

高橋：投票するのは誰ですか？

古在：教授、助教授。

小久保：それは立候補があつてですか？

古在：立候補はないよ。だけどともかく、末元さんの頃はね、どうも僕は知らないけどさ、わりに末元さんの周りの人の結束が固くて、いろんな会議に行ってもなんかみんなもう決まってるんだもん。僕らが反対ブツブツ言ってもね、みんな最初から決まってるんだよ。それでなにか、僕はいろんな悪口を言われたらしいんだよね。まあまともな悪口はね、「古在が台長になると文部省が予算をくれない」というのがあつて。

高橋：なんでですか？

古在：僕はやっぱりね、名前からしても左翼になっているんですよ。名前からしてもっていうのはうちの叔父が左翼だったりで、古在っていう家は左翼なんだよ。

高橋：でも実際、先生ご自身は全然関係なかったわけですよね？

古在：いや全く関係ないことはない。実はたまにまなかのことで、当時の文部省、最後にすばる望遠鏡の予算をつけた時の局長に会ってそういう

話したらね、「そういう話、ありましたよね」なんて言ってた。

高橋：じゃ文部省の耳にも一応入っていたわけですね。

古在：一応ね、ある意味でブラックリストには載っていたらしいんだ。それでしかもね、竹内峯さんというのは左翼の人だね。共産党の人でね。あの人が僕の書いた本の書評を共産党の雑誌に載せているんですよ。それが僕の罪状になってんだよ、文部省では。面白いところですよ。

高橋：それで関係していると思われて。

古在：うん。それで僕はかろうじて台長になったんだよ。でも結局なってみるとね、あんなに悪口言われたわりにはあの人そんなに悪い人じゃないってことになつたらしくて(笑)。

小久保：当時、台長の任期は？

古在：2年。

小久保：2年を何回やってもいいんですか？

古在：僕はだから台長に4回当選したんですよ。で、最後の年は1年。

小久保：東京天文台で7年間台長をされて、国立天文台になってから6年。だから全部で13年。これ多分一番長い。

古在：いやいや、あのね、東京天文台の初代の台長は30年ぐらいやっているんですよ。20代で台長になったんだ。

小久保：寺尾(寿)さんって方ですね。

古在：寺尾さん、30年ぐらいやってる。その次だつて言われているの。通算すればね。

高橋：寺尾さんの頃は選挙じゃなかったんですよね？

古在：ああ選挙じゃないんで。萩原先生が台長の頃に台長の選挙規定みたいなのがちゃんとできたんですよ。僕の前末元さんも大沢さんも4年やった。2期やったのではないかな。

高橋：東京天文台時代は何回も当選して信頼があつたんですね。

古在：はじめ悪口言われた割には長くやった。あ

いつはよくよくやらせてみたら、そんなに悪い奴じゃないんだと(笑)。たくさん悪口言われたから、その分だけ良かったんだ(笑)。

小久保：古在さんが台長になられた一番の理由はなんですか。

古在：それは分からない僕には。その前の大沢さんとか末元さんとかがちょっと強権的だったよね。反対するともものすごく嫌がるというかね。

高橋：萩原先生がもともとそんな感じでしたか？

古在：そうだね。でも萩原先生は偉い先生だからと思っていたんだよ、みんな。

高橋：それを見習ってしまった。

古在：うん、そうじゃないと言うかもしれないけどさ。

高橋：末元さんから何か引き継ぎみたいのはあったんですか？

古在：ない。一切ない。だから、末元さんも国立天文台の評議委員になってもらったんだ。

小久保：民主的にやろうというか、そういうことはあったんですか？

古在：あのねえ、僕が知っている限りでは、大沢さんも、特に末元さんは会議の内容を予め何人かの人には言って相談して、賛成させておいて。それで会議に行くとそういう人たちがいて賛成だと言うんだ。僕が台長になったときも、その中の一人が議題や何かのことで相談してくれというから、僕はいやだって言ったんだ。大事な議題はやっぱりちゃんとみんなで議論できるようにしたいと言って。

高橋：ちゃんと議論しようよ。台長になるだいぶ前から票は入っていたということでしたね。

古在：入っていたんですよ。なんでだか知らないけど、東大でも紛争のころは方々でわりに若い人がなったりしたことがあって、僕の同級生で新聞研の所長になった人がいるよね。その男はね、紛争中の東大の広報委員会の委員長だったよ。

高橋：古在さんが台長になったのはおいくつですか？

古在：53だね。

高橋：それはかなり若い方ですよ。

古在：だろうね。今の林台長だって53ぐらいでなったでしょ。台長になったのは。

小久保：そうかもしれないですね。

古在：だから、彼に言うのだけど、俺のときに比べれば規模は10倍ぐらいになっているのだからって。

高橋：古在さんのときにも規模はどんどん大きくなっていったのですか。

古在：僕らのときは野辺山ができて、野辺山の維持費で予算が増えた。それまでは東京天文台はもっともっと惨めな状況だった。だから、教官当たりの積算校費は一応は増えてきたんだけど、観測所の経費というのは実験装置の維持費と同じで増えないんだよね。岡山だってはじめはずいぶんたくさんあって、小さい望遠鏡なんかそれで作っていたんだけどね。それで東京天文台全体としてそういうのを面倒みないといけないというので、教官当たりの積算校費で他のところに回す分をずいぶん使っていたんですよ。

小久保：古在さんは台長になってどう思ったんですか？うれしかったですか？

古在：うれしいかどうか知らないけどさ、やっぱり僕らは東京天文台がある種、変えなきゃいけないとはずっと思っていたよね。だから僕らは畑中さんを頼りにしていたんですよ。例えば新しい装置を作ろうなんていう時も、一応全国の人に相談すると言いながら、あんまり相談していなかったりね。やっぱり天文なんかはさ、人数が少ないから全国の天文の人が一致して推してるっていうようなことじゃないとなかなか予算は通らないんですよ。それで、そこまで言うと怒る人がたくさんいると思うんだけど、東大はそもそも共同利用には向かないところなんだよね。

●大学共同利用機関

古在：例えば原子核研究所が一番最初に共同利用

研として東大にできたけれどね、結局、共同利用というからには所長の選挙なんかも全部共同利用委員会でやるっていうのが原則だけど、それは東大が絶対に認めなかった。

高橋： どうしてですか？

古在： これは僕はわりに理解できるんですよ。というのは、東大では戦争中に何人かの教授の人が追放されたでしょ？ 外部の圧力でね。だから外部からのそういう口出しは駄目だっていうことになったんですよ。それで、南原(繁) 総長とか矢内原(忠雄) 総長の頃はやっぱり、よその人の意見を聞いて所長を決めるというのは難しくて。矢内原さんなんか戦争中に追放された人ですよ。それから原子核研究所の初代の所長は菊池正士さんというわりに有名な方です。だけどあのときに矢内原先生が「菊池正士が戦争中に何をやってたか、君たち知ってるか」とまで言ったそうだよ。要するに戦争協力した人なんだね。それでともかく絶対やらせなかったんだけど、あそこは二重構造になって、内から見ると外部の人の意見を入れてないけど、外から見ると入れるような仕組みをしたんですね。

ところが岡山はそれをやらなかった。岡山を作るときも共同利用にしたかったんだけど、東大は共同利用とは言わなかったんだね。例えば今、みなさん国立天文台に来るときに共同研究者の旅費とかもらうでしょ？ ああいうのは共同利用機関にならないと出ないんだよね。岡山に来る人はね、東京天文台と東大理学部の人に分しか旅費を認めなかった。だからよそから来る人は、自分の旅費で来たんですよ。それで東京天文台としてはやっぱり困ってしまって、京大と東北大の先生を呼んで、プログラムの相談会というのをやったわけ。要するに、観測プログラムはこうしますと。

東京天文台で初めて共同利用という名前になったのは、野辺山なんですよ。野辺山で初めてよそからの人の旅費も出るようになった。ただ、あそこも人事については触らせなかった。そういう意

味で、東大は共同利用に向かないところなんだよ、僕に言わせれば(笑)。

高橋： 戦争中の経験があってということなんですね。

古在： だからそういう理屈を言われるとね、それはもうもっともだと思うよ、僕なんか。

ところが、天文みたいなどころだと一応全国の人が全部協力してやるというスタイル、スタイルのみならず実際的にもそれをやらなきゃなかなかものができないでしょう？ 僕なんかはそう思っていたしね。

それから、末元さんは岡山の次の望遠鏡は国内で作るって言ってた。外国でなんて絶対できないって言ってたんですよ。

高橋： 岡山の次というのはJNLT (Japan National Large Telescope)、のちのすばるですね。

古在： それで僕が台長になって、そのころ光天連(光学赤外線天文連絡会) というのができていて、初めは石田恵一が委員長で、そのうちに小暮(智一) さんが委員長になった。あそこはなんか三本柱とかいう方針を作って、まずはじめに国内に3mクラスの望遠鏡を作ると。それから2mクラスの望遠鏡を外国に作ってもかく外国で観測できるようにする。最後に数mの望遠鏡を外国に作るという決議をしたわけよね。ところがね、それに対しては天文の他の人、例えば林(忠四郎) 先生とか、小田(稔) さんとか早川(幸男) さんとかいうのがおかしいってずっと言ってて、あの辺の支持は得られなかった。小暮さんたちはどうもそれをよく理解していなかったような気がするんだよね。それで僕が台長になったら、やっぱり3mだかの望遠鏡を国内に作る予算を出せと言って来たんですよ。だから要するにあの頃、光天連の中でも海外派と国内派と分かれて競ってたんだよ。

高橋： 国内派っていうのはまず国内で練習してから海外にっていうことですか？

古在： いきなり海外は無理だと。末元さんもそう言ってた。

高橋：もっと経験を積んでから海外へということなんですか？

古在：それはもう確かなんだけどね。それで林先生なんかはやっぱり大学共同利用機関を作らなければ外国に望遠鏡なんか作ることではできないって。これは実際上もそうだったんですよ。どういふことかという、野辺山の宇宙電波観測所を作るときもね、予算要求は天文台の事務だけじゃできなかったの。能力なかったんですよ。この末端の事務にはね、いい人が来なかったんだ。少しいい人が来るようになったのは、野辺山で予算がついてから。だから、野辺山の予算要求は東大の経理部がついてやってくれた。

●文部省

古在：それでちょうど僕が台長になったところに、第二次臨時行政調査会*1っていうのがあった。それでいろいろ文部省関係の見直しもやっていて、統計数理研究所とか遺伝研とか、そういうのはやっぱり大学共同利用機関にしろというのがあって。それで水沢の緯度観測所もそこで問題になったんですよ。これを言うとあのときの所長は怒ったんだけど。それである時たまたま文部省の当時の局長に会ったらね、「天文台は緯度観測所と一緒にしてくれないか」って言ったんですよ。大学共同利用機関で。それでまあ本当を言うとね、僕はもっと前から天文台が大学共同利用機関になれるかどうか、天文でそういうのができるかどうかというのに対して文部省がどう思うかわからなかったんだよね。それでどうも局長がそう言うからね、これは大学共同利用機関ぐらいにはなれるんだと思ったわけね。

それで、光天連の運営委員会が何かに行ってるね、「国内に望遠鏡作れて言うけれども海外にいい場所があるというのは知れ渡っている。それで、もし文部省がどうして海外に作らないのかと

質問してきたら、俺は何と答えればいいのか。」って質問したんだよ。そういうことはあり得るわけよ。だって、小田さんとか林さんとかみんなそう思ってたから。

高橋：それはいきなり海外に作るっていうことですか？

古在：そうですね。ともかく3mでも国内に作るよりは海外に作ったらどうかっていう話が出たらどうすんのかって聞いたんだよ。そしたら、文部省がそんなこと言うはずないと思っただけで、「それじゃおまえの判断だけで聞いてこい」って言われたんだよね。「聞いてくるのはかまわない」って言われたんだ。それでさっきの緯度観測所と一緒に外へ出ないかと言った局長のところへ行ってるね、こういう計画があって、海外に望遠鏡作りたいたいという要望があるんだけどどうだって言ったらね、「いいですね」って。だけどあれはお世辞だった、今考えてみれば。それで結局、僕としてはうまくいけばできると思っちゃったわけね。それで僕は東京天文台に戻ってきて、「海外にやることだってできないことはないんじゃないか」って言って。それで、そのとき小平氏はまだ理学部の助教授だった。で、あれを教授に呼んできてやろうって言って始めたんですよ。

それで結局、文部省も初めはいい計画ですねなんて言ってたけどお世辞だったんだね。ただ、東京天文台が大学共同利用機関になるという準備調査費を出せば、望遠鏡の準備調査費をつけてやるって言ったんですよ。これは間接的にだけど、東大経理部長がそう言ってたよ。だけどそれはついにしなかった。

高橋：出してくれなかったんですか？

古在：うん、それで文部省はね、「古在が文部省にだまされた、だまされたって言ってるだろう？」って言ってたんだ。僕はだまされたと言ったことは1回もないんだ、ほんとは。でも向こう

*1 財政再建のため1981年に鈴木善幸内閣のもとで設置された。

はそう言ってたらしくてさ。それで向こうの担当の課長がえらく心配してくれて。それで、僕は正式に望遠鏡の調査費が出ないにしても、調査だけはやれるようにしてくれて言ったわけ。それで海外調査の科研費でまずマウナケアに気象観測の装置を作った。それで、中桐(正夫)君と宮下(暁彦)君が二人で行ったんだ。でもその後なかなか本予算をつけてくれなくて。2~3年落ちて、これ以上落ちたら台長は辞任しなきゃいけないと思っていたら、やっとついたんだよ。

高橋：本予算がついたんですね。

古在：マウナケアの望遠鏡の予算がついた。

高橋：その時には、光天連も海外でっていうのでまとまっていたんですか？

古在：まとまっていた。

高橋：じゃ国内派の人も納得したわけですね。

古在：納得したんだろうね。だけど中にはやっぱり約束が違うって怒ってた人はいたけどね。

高橋：さっきの文部省の局長とか課長とかっていうのは、何局なんですか？

古在：あれはね、今は新しい文部科学省となって知らないけど、昔は学術国際局というのがあった。

高橋：学術国際局というのがあったんですね？で、その課長っていうのは？

古在：課長っていうのは、僕らの担当はね、研究機関課っていうのかな？で、初めに望遠鏡の調査費がつかないで、僕に申し訳ないって言った人が課長で、そのうちに局長になって、その時に望遠鏡の予算がついたんですよ。あの人のおかげなんだって俺はいつも言ってんの。

高橋：だいたい局長クラスが認めればもうそれはいけると。

古在：ただ、文部省っていうのはさ、文部省全体として予算の枠が決まっているでしょ？それで結局、研究でそんなに出そうとすると他の予算が

通らないんだ。だから、中で認めてもらうのがたいへんらしいよ。だけどあれは補正予算だから通ったんだ。だと思えますよ。

高橋：文部省の局長とか課長とは普段からおつきあいがあったんですか？

古在：いや、ただやっぱり文部省の研究機関課の課長でも局長でもね、黙って1年か2年やってればいいと思っている人と、ほんとに何かやろうと思う人と、それは明らかにいるね。

高橋：じゃさっきの方は意欲のある方で。

古在：うん。

高橋：じゃその方のおかげっていうのもあるんですね。それは何という方ですか？

古在：長谷川さん。東大の教養学部教養学科で出た人だったよね。で、その人は局長を辞めた後、あんまりいい職に就けなかった。文部省の中で僕らの望遠鏡でゴリ押ししたんで、文部省の中で切られたんじゃないかと思って、僕なんかえらい心配したことあった。

●東大側との議論

高橋：東大側とも改組について議論はあったんですか？

古在：東大側も結局ね、最後までブツブツ言っていたんですよ。

高橋：東大側として反対する理由というのは？

古在：いろいろあるらしくて、宇宙研^{*2}には東大から出ると言ったんですよ。ところがね、出てみるとしまったと思った人がずいぶんいたらしい。

高橋：それはなんでですか？

古在：やはり、宇宙研がこういう手柄を立てたといつて新聞に出ると、あれは東大にいたら東大の業績になっただろうとか、そういうことではないかと思うけど。

高橋：ロケットとかですね。

*2 1981年に東京大学宇宙航空研究所が改組して文部省宇宙科学研究所（ISAS）となる。現在は宇宙航空研究開発機構（JAXA）の一機関となっている。

古在：それからもっと前に僕は東大紛争後に東大の何とか委員会っていうのに出て、そしたら学部の先生で「何で研究所が東大にいるんだ」って言う奴がたくさんいやがってさ。だからなんかの時には出なきゃいけないと思ってたし、海外に望遠鏡を作りたいなんて言ったら東大から出ろって言われると思ったんだよ。

高橋：総長はどういうお考えだったんでしょうか。

古在：野辺山ができる前、向坊(隆)先生が総長特別補佐だったときに、野辺山のことで頼みに行ったことがありますよ。だけど向坊先生が言うには「まあ予算は出してやる、だけどできたときは考えろ」と。要するに出ていけというようなことを言われた。それで後になって実際に僕らが東大から出るなんてことを聞き及んで、「お前たち、出てもいいけども野辺山を置いていけ」って言ったよ、あの人(笑)。だから野辺山はできたときから華々しかったよね。それから向坊総長はね、東大の人員、定数を大幅に減らした最初の総長だと自分のことを言っている。それで僕は次の総長の平野(龍一)総長のところにも行って、「東大から出たい」って言ったら、「君は東大が嫌いなのか」って言われちゃってさ。そんな恐ろしいこと言ってるつもりはないんだけど(笑)。

それで最後は森亘総長。森さんはね、どうもやっぱり、はじめは僕が独走しているんじゃないかと思ったらしくてさ。僕が三鷹にいない日を見計らって来て、何人かの人に聞いたらしいんだよ。

高橋：でもやっぱりみんなも出たいと思ってるよ。

古在：必ずしも独走ではないということがわかって。

高橋：森さんは残ってくれという感じだったんですか？

古在：森さんは、なぜ出る必要があるのだと。当時、理学部長は西島(和彦)さんで、西島さんは「東大にいたって望遠鏡ぐらいできるよ」と言っ

てたけど、それは無理だったと思うよね。それからその後の理学部長が有馬(朗人)さんで、あの人は実務的で「出るのだったら、何講座か残せ」と、それを一生懸命言っていた。あそこの天文学研究センターを作ったのはそのため。あと観測所を一つ残せと。東大の天文教室はさ、理論の人ばかりだったじゃない。だから観測の人がいないと困ると言って。それで岡村(定矩)氏はまずセンターに残って、それで理学部に行ったんだよ。

高橋：天文台と東大の天文学科で人事をどうするみたいなことで議論はあったんですか？

古在：なかったよ。あんまり。相談はなかった。だってね、僕らが東京天文台に入ったころは、東大理学部の人は天文台をずっと下だと思っていたんだよ。

高橋：天文台が東大を出るとなって天文学科の人たちはどういう反応でしたか？

古在：天文学科の人は何も言わなかった、と思う。東京天文台よりも東大天文の方がずっとお金なかったよね、可哀想に。天文台の人たちが大学院生の指導教官である分だけ天文台に経費が来ていたんだけど、それを天文教室に渡したんだよ。事務の人はとても喜んでくれたけど、他の人はあまり感謝したような顔はしなかった。

高橋：今は独立していますが昔は同じ東大で天文学科も天文台ももっと一体になっていたのかと思っていましたけど。

古在：そうでもなかったね。天体物理の人などは藤田(良雄)先生を含めて毎週1回、三鷹に来て天体物理のセミナーをやったよね。昔、マイナーと言ったけど。だけど人事や何かで相談したというのは僕より上の、例えば末元さんを台長にするなどというのはきっと誰かに相談しにいったんだろうね。

高橋：台長のときに被選挙者っていうのは、台内だけではないのですか？

古在：あれはね併任の人でも良かったのではない？ 萩原先生なんかは併任、理学部の教授で、

萩原先生の前は理学部の人がこの台長をやっていた。萩原先生はともかくオールマイティーだったからね。あの人が全部取り仕切っていたような顔をしていたよ。

高橋：東大を出ていくときに、問題になったことは何かありましたか？

古在：いろいろあってさ、宇宙研は駒場を出るときに駒場の権利を一切なくして相模原に移ったでしょ。天文台も出るからにはこの土地は明け渡せと森さんが言ったんだよ、はじめ。

高橋：三鷹を出るといいますか。

古在：ええ。僕は「三鷹は東京天文台を作るので買ったところで東大にご厄介になっているわけではない」と頑張った。

高橋：それで認められたわけですか。古在さんとしては出なくてはいけないという理由は、事務的に処理できないということのほかにもあったんですか。

古在：やはり根本的には、いつか京都の川口(市郎)さんに1回、話を聞いてくれよ。川口さんなんかはやはりだいぶ僕に愚痴をこぼしましたよ。いろんなことで。岡山だって共同利用と言いながら、全然そうっていないとかね。

高橋：もっと共同利用にしたいと。改組を考えていく中で、誰か相談した人はいたんですか？

古在：相談したのは当時、文部省の学術審議会の委員だった小田さんとか早川さんとか。林先生は盛んに大学共同利用機関にならないといけないと。

高橋：天文台の中では相談した人はいたんですか？

古在：あまりいなかった。だって末元さんとか大沢さんとかいうのは反対だったもん。だけど多くの職員は賛成してくれて、事務の担当者は夜遅くまで予算要求の仕事をしてくれました。

小久保：池内(了)さんがいろいろとお手伝いしたという話を聞きましたが。

古在：ああ池内さん、彼は単身赴任で官舎に住ん

でたんですよ。大体事務の仕事ってのはさ、文部省とのやり取りなんか夜やるんだよね。そうするとね、夜にいて対応してくれるのが彼だった。それでちょうどその頃にね、FAXなんてのができたんだね。その前までは、「明日の朝1番で書類を届けます」ってやってたんだけど、FAXで送れるということになったんでそれが効かなくなっちゃって、夜中に文書を直さなきゃいけない時は彼がやってくれたし、僕自身もずいぶん彼に仕事を頼んだ。要するに国立天文台になった時ね、部門というのを作ったでしょ。その教授だか助教授だか助手だかってのが何をやるのか全部書け、って言うんだよね。天文台の新しい職務。それをそこになりそうな人に書かせたらもう重複してどうしようもないからね、「池内さん、悪いけど一人で書いて」って言って(笑)。

高橋：それは研究についてですか？

古在：研究。だからどういう職務かっていうことについて。だからそれは言ってみれば本当かどうかわからないけど、全部コンシステントになるように書くわけよ。こっちとあっちが重複しないようにするとかさ。重複すると、そんなの要らないじゃないか、って向こうが言うだろう。そういうのは池内さんがやったんです。だから池内さんには、「文章を早書きできるようになったのは俺のおかげだよ」なんて(笑)。

高橋：じゃあ事務的なことをだいぶやってもらったと。

古在：研究に関連した事務的なことは彼がずいぶんやってくれたんだ。

高橋：改組の仕方自体は、なにか相談したりしたんですか？

古在：あのね、仕方っていうのは要するに改組するより仕方がないと。それからね、改組したらどういふ部門を作るかなんてのはね、東京天文台の将来計画委員会で案を出したんだよ。その時の委員長は内田豊氏なんですよ。

高橋：そこで改組したらどういふ部門を作ってと

かいう議論をしたんですか？

古在：うん。大体それに沿ってやったんだと思うけどね。

●将来計画委員会

高橋：将来計画委員会の話が出ましたが、できたのは台長になるちょっと前ですね。日本学術会議と東京天文台それぞれで将来計画委員会があったということでしょうか？

古在：あったですね。あのね、学術会議というのは、今もうないのかな、天文学研究連絡委員会という天文だけのグループがあったんですよ。そこで、藤田先生が委員長の時に初めてそういうのをやったんですよ。それで、そのときにさ、東北大の竹内峯さんが立ち上がってね、「俺は子どもの時に初めてデパートの食堂に連れて行かされて、父親に好きなものを注文しろって言われた時に、そういうの選んだことなかったから、何が好きだかわかんなかった。で、今日も『将来計画』って言われたって、いきなりじゃわかんない。」って言った。いやそれまではだいたい将来計画というのは萩原台長が決めて、上意下達なんですよ。みんなにこれやられて。それで、はじめてあの頃、藤田先生がみんなにも意見を聞くっていうことをやりだしたんですね。

それから僕がアメリカから帰ってきてしばらくして広瀬さんが台長だった頃かな。その頃から東京天文台も将来計画委員会に若手を入れるっていう話になって。東京天文台将来計画っていうのはさ、三鷹の土地を確保するためのものなんだよね。要するにね、東大に将来計画委員会みたいなものがあって、土地をどうするかっていう話で、それで東京天文台の中の一部を東大で取ろうという話があるって言われた。で、ここはこんな風に使ってますよって、これからもこういう計画がありますよっていう風にかきやいけないんだっ

て、始めに僕が委員になった時に言われたよ。だから、萩原先生の時代の将来計画っていうのが、まだほとんどできてなかったんじゃないかな。シュミット望遠鏡はその頃、基本構想はできたのかな。もっと後かもしれないな。

高橋：堂平^{*3}もその頃の話ですか？

古在：あっ堂平はね、宮地さんの時です。僕はアメリカにいたときに萩原先生の話をさんざん何十辺となしに聞かされたんだけど、萩原構想だと岡山に74インチと、36インチを2台作るはずだった。山が一つ余ってるでしょ。今度京都が望遠鏡作るどころ。だから36インチをあそこにもう一つ作るはずだった。ところが宮地さんが台長になって、やっぱり岡山だけでなく三鷹に近い堂平にも一つ作んなきゃいけないってね。で、堂平に36インチを作った。それを萩原先生がいつも怒ってたよ。俺の言うことを聞かねえって。

高橋：じゃあ萩原先生の構想は岡山に二つ36インチを作ろうということだったんですね。それで広瀬さんが台長の頃から、みんなの意見を聞いていこうと……。

古在：で、なんかいろんな意見が出て、だからその頃やっぱり電波を作んなきゃいけないって話で。それからもうあの頃から岡山の次の望遠鏡のことを言ってたのかな。

高橋：それが後に野辺山の45メートルとすばるとなるものですか。

古在：うん。それからその中間に木曾のシュミットもできたんだと思うんです。シュミットは要するに広角の望遠鏡で、掃天のためですよ。ただ、木曾のシュミットは関係者に言わせれば、恒星の研究者の組織があって鏑木先生なんかが中心だったけど、あそこの意見とだいぶ違うものになっちゃったって怒ってた人がいた。

高橋：じゃあ大きなものは野辺山と木曾とすばる。

^{*3} 1962年に埼玉県の堂平山に建設された。2000年3月に閉鎖。

古在：野辺山については、萩原先生は「あれは俺が立てた計画だ」って威張ってたけど、全然違うものだって言われてるね。岡山は要するに出来合いのものを買ったわけですよ。それに対して野辺山なんかは自分たちで、こういうふうにやってくれて言って作った望遠鏡ですよ。だいふ違うんだよね、そういう意味では。

それから僕が東京天文台長のところに空電研から田中春夫という人に来てもらっていたんですよ。太陽電波干渉計を大々的にやったのは彼が日本で初めてですよ。それで、野辺山ができるころに田中さんをこっちに引き抜いたんですよ。そしたら田中さんは、向こうは定年が63なんだけど、こっちは60で、「定年が近くなっただけど行ってやるわい」って来たんだけど、電波の人が面白くなかったらしいんだよね。畑中門下じゃない人が来たというんで（笑）。そういうことがあって、空電研でも干渉計は時々更新しないといけないんだけど、東京天文台には野辺山に太陽電波干渉計があって、その干渉計を二つとも新しいのにするのは無理だろうと。それでどっちかが干渉計を作る予算が通ったら、向こうで取ったらこっちが出すと、こっちが取ったら向こうが出すという、そういう内々の約束をしていたわけね。向こうの所長と。

高橋：出すというのは？

古在：人員。だから国立天文台になったときに空電研の一部が来たわけ。そうしたら、名古屋に飯島（宗一）総長という有名な総長がいて、「古在という男は俺に黙って人数をもっていくのか」と言うからさ、僕、ご挨拶に行ったことがある。

空電研というのは何かね、戦後になって、空電、要するに雷だよ。雷の研究をするというので、わりにアメリカ軍も推奨して作ったんだとかいう話だよ。

高橋：田中さんを引き抜いたのはやはり田中さんが能力的に優れていたと。

古在：そうそう。なんかこういうことを言うと怒

られるけど、畑中さんが亡くなっていたのでやっぱりみんなが不安だとか言うんです。

高橋：田中さんがリーダー的な存在になったんですか？

古在：そうそう。それで田中さんと僕が直接会って、話をしたことがあるのだけど、自分も予算が何かでいつも東大にしてやられていると、だから東大関係に行きたいと言った。

高橋：先ほどから、畑中さんが生きていたらという話がありますけど、畑中さんがすごいのはどういふところですか？

古在：やっぱりね、何というのかな、わりに畑中さんは外部のつながりも多かったし、何か、東京天文台はかなり閉鎖的だったよね。そういうのを打破できる人ではないかと思っていた。

高橋：物理系の人とか、地球系の人とか知り合いがいっぱいいて。

古在：あの人はそもそも、国連の代表にもなった人なんだよ。宇宙空間委員会ができたときに畑中さんが日本代表で行った。

高橋：いろんな人脈があって、人望もあってということですか。先生はだいふ親しかったんですか？

古在：僕なんかは畑中さんのおかげで職を得たようなものだから。考えてみれば僕なんかの面倒をみてくれたときに畑中さんはまだ四十代の半ばで。

高橋：人をまとめるのが得意ということですか。

古在：そうだろうね、いろんなこと。ただ、よそでは畑中さんは偉いと思われているけど、東京天文台に来ると先輩方がいてさ、自分が台長になったらたいへんだと思っていたんじゃないかな。

高橋：昔からの天文の人は保守的なイメージがありますけど。

古在：あるよね。それからやはり、物理の人とやると物理に乗っ取られると思っている人がずいぶんいた。

高橋：畑中さんは物理とかいろんな人とやってた

わけですよ、ね。

古在：そうですね。でもあからさまにそういうことを言っている人がいた。「物理の人に乘っられるよ」って。だけど、僕らの頃はそうではなくて、例えば小柴(昌俊)氏はさ、スーパーカミオカンデの予算は天文の枠で取ったんですよ。

高橋：そうなんですか？

古在：あれはね、高エネルギー物理の枠に入らないというんだよね。本当はむしろ天文の枠なんていうものはなかったんだけど(笑)。だから、枠はないのだから、そうやって入れたときに、小柴君に、こういう事情だからあんた日本天文学会に入れよと言って、そうしたら日本天文学会からノーベル賞が出たんだよ(笑)。

高橋：じゃあ、結果的には良かったんですね。

参考資料

- ・戦後の東京天文台長
1946.10-1957.3 萩原雄祐
1957.4-1963.3 宮地政司
1963.4-1968.11 広瀬秀雄
1968.11-1973.1 古畑正秋
1973.1-1977.1 大沢清輝
1977.1-1981.3 末元善三郎
1981.4-1988.6 古在由秀
1988.7-1994.3 古在由秀(国立天文台長)

・東京天文台関連年表

- 1960.10 岡山天体物理観測所開所
- 1962.11 堂平観測所開所
- 1969.10 野辺山太陽電波観測所開所
- 1974.10 木曾観測所開所
- 1978.4 野辺山宇宙電波観測所発足
- 1982.4 野辺山45 m ミリ波電波望遠鏡稼働
- 1988.7 国立天文台発足
- 1991.4 すばる望遠鏡建設開始

A Long Interview with Prof. Yoshihide Kozai [4]

Keitaro TAKAHASHI

Graduate School of Science and Technology,
Kumamoto University, 2-39-1 Kurokami,
Kumamoto 860-8555, Japan

Abstract: Prof. Kozai served 13 years as the Director-General of the Tokyo Astronomical Observatory and National Astronomical Observatory of Japan. During that period, he faced two major problems: reorganization of the Tokyo Astronomical Observatory and promotion of Japan National Large Telescope, which is now known as Subaru.